

読者文芸

長生ということ 永田耕衣



「大きくなったら」

河原碧子 画

いま八十三歳の私は、六十代の頃から「長生」の二字が好きで、何度も揮毫して掛軸に仕立てさせたりしてきた。数えの七十二歳で亡くなった医博、斎藤茂吉の一首は、

みづからの 落度などとは 思ふなよ

わが細胞は 刻々死するを

茂吉

というアキラメのいいところをズバリと言いつつ切っていた。私は五十歳代に、

腸の 先づ古び行く 揚雲雀

耕衣

死蛩に 照らしをかける 蛩かな

同

といった死生観に根ざす句々を作っていた。

つまり「細胞の刻々死するを」詩的に受用しようとしていた。このことは今も変わらない。

夜はときに 長寿かなしき 瀧の音

龍太

つい先日この句に出会って、「長生・長寿」という事も「ときに」厄介で悲しいことだと思った。「かなしき」

は「悲しき」とも「愛しき」とも解し得るが、どっちでも同じ事だと思った。そういう「ときに」今度は「長生」の二字を可笑しと談じた妙一句に出会った。

長生の をみなはをかし 閑古鳥 寺井文子

という、妖しくも笑いを呼ぶ作行の句だ。

縁蔭に 三人の老婆 わらへりき 三鬼

を直ぐ思い出させるが「長生」一句の方が妙に品位がありそうに思えるから、「長生」を可笑しがるのも切徳が

あろうというものだ。正宗白鳥はいつまでも飽きない作家だが、いつもイロニイの利いた峻烈さを持續していた。「思い出すままに」というエッセイのなかで
「諸行無常。東洋の我々は、そういう物の見方によって詩趣を覚えたがるので」といった口吻を漏らしていた。同感至極であった。

（俳人）